は，学会本部と大会委員長の協議により，場合によっては会場費をとるか，否かを決めたいので，御協力願いたい」むね述べ承認された．したがって，昨年秋の大会から参加費を徴収することも可能であったが，参加費の徴収は東京の大会から行なうのが妥当との意見もあり，関西支部の御骨折りで参加費を徴収せずに大会を開くことができた．

しかし，明年秋の札幌の大会には会場費に約25万円を要し，従来の学会予算（20万円）では開催は不可能であり，予算の増額と参加費および若干の寄付によって運営を計画したいという北海道支部の要請と前記経緯とから，昨年12月7日出席理事全員一致で春から参加費を徴収することが議決された．

以上経緯を概略説明したが，個人的見解として，学会員全員が出席できず，約90％以上の人はその恩恵を直接は受けられないことを考えると，参加費を取ることは受益者負担という意味において当然であると考える．気象学会の財政的基盤はこれら会員によって支えられているのであり，第一線の研究者もこの事実をよく認識していただきたい．

Prof. Dr. Hans Israël 逝く

その著書 "Atmosphärische Elektrizität" 上下2巻で日本の気象学者にも親しかった Israël は，1970年8月29日に68歳で死去された．

彼は1902年4月7日の出生で，1920年から1926年までマールブルグとミュンヘン大学に学び，1926年にマールブルグ大学で学位を得た．その後，同大学，ホーエンハイム農科大学，フランクフルトエ科大学，ライデン大学等に勤めた後，1933年からはバード・ナウハイムのウィリアム・ケルクホッフ研究所の部長，1936年からはドイツ気象局のポツダム観測所の技師となり，1945年からは捕虜生活を送ったが，翌年釈放されて，ウュルテンベルグのフランス占領地区気象局に勤め，その間にブーハウに大気電気研究所を設立し，そこの仕事の指導をした．1953年からはアーヘン気象台の台長となり，1954年からはアーヘン工科大学教授を兼任していたが，1963年からは同大学教授専任になった．IUGG 関係のいくつかの委員を兼ねていた．

冒頭に記した2冊を含めて著書は9冊，総合報告は17篇，研究論文は実に290篇を越すという．著書は1937年に出した最初の1冊だけがバード・ナウハイムの気候に関するものであったが，その他は全部放射能か大気電気に関するもので，また Dolezalek らの尽力で，「大気電気」の英訳の仕事が進んでいたが，その第1巻は1970年彼の死去後に出版になった．綜合報告の中には，アメリカ気象学会のコンペンディウムに出した「大気電気観測法」「大気放射能」もある．初期の論文は大気イオンに関するものが多いのであるが，後には大気の放射能に関するものが多くなった．注目されることは，彼が気象台関係に勤めていた年数が長いこともあって大気電気要素に対する気象の影響に関する論文が多いことである．ユングフラウヨッホその他高山での大気電場の観測によって，全地球的な変化を発見し得るか，また交換層の上限がどんな高さに達するかという研究もある．

1962年10月から半年間はニューメキシコ鉱工業大学に招聘され，当時学長の Workman はじめ研究所のスタッフ約30名を前にして，大気電気学の講義を行なったが，当時同大学に滞在していた三崎方郎博士によると，その講議は測定資料を豊かに使って，基礎的な事項から議論を発展させ，終止緊張して聞かせるという面白いもので，その該博な基礎知識と総合力が強く印象に残るものであったという．私自身もポーツマスとモントルーの2回の会議で合っているが，人柄はその論文から想像されるようないかめしいものではなく，なかなかの社交家で，話し方などはむしろ賑やかな感じであった．

今アメリカで活躍している Dolezalek, Kasemir, Oster らは，皆彼の直弟子である．息子の Gerhald は自然放射能を専攻し，共著の論文も何篇かある．1967年の Chalmers に引続き，Israël という偉大な大気電気学者を失って，寂寥の感を禁じ得ない．（畠山久尚）